

地主のつとめに目覚め、新しいコミュニティを築く

「ちっちゃい辻堂」プロジェクト

#07

100年先の辻堂の風景の 最小単位

石井光さん(33)は神奈川県藤沢市辻堂で300年以上前から続く地主の13代目である。2023年6月、石井さんがオーナーとなる「ちっちゃい辻堂」プロジェクトの第1弾「ちっちゃい辻堂 久根下」が完成し、お披露目の説明会と見学会が行われた。

プロジェクト名の由来は、「100年先の辻堂の風景を想像して、その最小単位をつくる」ということ。コンセプトは「ゆるやかに集まってつくる土とつながった暮らし」だ。プロジェクトの全体像は、今回の「ちっちゃい辻堂 久根下」と、すぐ近くで建築中の3軒の長屋のある「ちっちゃい辻堂 出口」(久根下と出口はそれぞれ、かつての字名)を含めて約2,000坪に及ぶ。

「ちっちゃい辻堂 久根下」には、4棟の戸建て賃貸住宅と、それらをゆるやかにつなぐ辻(十字路)を模した通路、畑や果樹、井戸、堆肥場、コモンハウスがある。4棟の住宅は、神奈川県産の杉等国産の木をふんだんに使い、時間が経つほどに美しく味わい深くなるように設計された。家庭菜園の野菜を泥付きのまま持ち込める土間キッチンや、空調設備に頼りすぎず、太陽熱や風を取り入れた生活ができる工夫もなされている。塀や門はなく、各戸の土間キッチンは辻の中央に向かい合う形になっており、住人はそれぞれの生活の気配を感じられる一方、植栽等によってプライベートな空間も確保することができる。戸建てでありなが

ら、長屋のような小さなコミュニティの暮らしを楽しめるようになっている。

「パーマカルチャー」を 取り入れたデザイン

屋外の設計もユニークだ。植栽の木は伐採されてしまう植木畑の木をレスキューして移植した。敷地には、地域で剪定された枝を使ったウッドチップ、竹林の竹から作った竹炭、お米を作るときに出るわらともみ殻等を使って、雨水を涵養し、樹木も根を伸ばすことができる微生物舗装を地元の人とのワークショップで作った。車が行き交うメインストリートから一歩足を踏み入れると、風が通り、土や木の香り、木漏れ日が心地よく、里山の森に入り込んだような、懐かしい気分を味わうことができる。ここに入居した住人たちが、地域の自然と触れ合いながらコミュニティとしての暮らしをどう築いていくのか、10年後の姿が楽しみになる。

全体の設計を手掛けたのは、環境共生型の設計を得意とするピオフォルム環境デザイン室の山田貴宏さん(筆者がオーナーとして関わる「okatteにしおぎ」の設計もしていただいた)。ランドスケープデザイン・施工は、失われつつ

ある黒松を新しい湘南の風景としてよみがえらせようという活動を行っているKUROMATSU PROJECTの岡部真久さん(「ちっちゃい辻堂 久根下」にも黒松が植えられている)。

ちっちゃい辻堂のこうした空間設計には、オーナーである石井さんが学んだ「パーマカルチャー」の考え方が取り入れられている。パーマカルチャーとはパーマネント(永続性)、アグリカルチャー(農業)、カルチャー(文化)を組み合わせた言葉で、永続可能な農業をもとに永続可能な文化、即ち、人と自然が共に豊かになるような関係を築いていくためのデザイン手法である。その大元には、辻堂で生まれ育った石井さんの「地主としてのつとめ」をめぐる葛藤と覚悟があった。



上:「ちっちゃい辻堂 久根下」を辻の入り口から見る。左下:神奈川県産の木材を使ったコテージのような建物。右下:辻に開かれた土間から、ほかの住人の気配を感じられる。写真撮影:奥田正治

Sachiko Takenouchi

(株) シナリオワークにて女性消費者を中心とする消費者研究、マーケティング戦略立案を多数手がける。
2015年4月、自宅を改装し、シェアハウス&シェアキッチン『okatteにしおぎ』をオープン。
(株) コンヴィヴィアリテ代表取締役。

地主は風景、景観、まちなみ、文化をつかさどる職能

#02

挫折から農的暮らしと地域コミュニティに関心

石井さんは代々受け継がれてきた地主の跡取りとして育ったが、20代になるまで、地主であることについて深く考えたことはなかった。むしろ、地主に対しては、マンションやアパートの家賃収入という不労所得で「楽をして生きる人」という、あまりよくないイメージを持っていたという。そのイメージが変わったのは、大学院での研究の挫折からだ。

神職でもあった祖父に連れられて、近所の神社でよくセミ釣り(地面から出てくるセミの幼虫を釣って、家に連れて帰って羽化させる)をしていたという石井さんは、カエルやトカゲなどの小さな生き物が大好きな少年だった。当時、動物学者の千石正一先生に憧れていた石井さんは、東京農工大学の大学院に進学。生き物の生息環境に森林伐採がどう影響するかをテーマに奄美大島で研究をしていたが、自動車の自損事故により研究活動を中断せざるを得なくなった。

大学院を休学した石井さんは8カ月間ロンドンに留学する。大企業や官公庁に就職するという既定のレールから外れたことで、石井さんは改めて自分の将来について考え直すこととなった。以前から気になっていたコミュニティデザイナー山崎亮氏の「コミュニティデザイン」に関す

る本を読み、友人から「パーマカルチャー」という言葉を聞いたのもロンドンでのことだったという。日本に戻った石井さんは、パーマカルチャーのセミナー合宿に参加した後、藤沢で有機農業を学んだ。また、「会員制コミュニティ農園 EdiblePark(エディブルパーク)茅ヶ崎」の運営にも携わるようになり、農的な暮らしや地域コミュニティへの関心を深めていった。

100年先の辻堂の暮らしを描く

その頃、石井さんは、宅地化により辻堂の自然環境が変化していくことに戸惑いを覚えていた。自分が幼いときに遊んだ空き地や草原、神社の緑が減り、それとともに虫やカエル、鳥などの生き物も姿を消していく。そのことが寂しかったという石井さんは、緑に囲まれた環境で多様な生き物と共に人が豊かに生きられる、循環型の暮らしを地域で広げていきたいと思うようになった。そして、「そのためには土地が必要」と考えた

き、「うちに(土地)があるじゃないか！」ということに気づき、初めて地主としての自覚が芽生えたそうだ。

石井さんが考える地主とは「地域の自然と寄り添った暮らしを広げる“土”の人」だ。「土の人」は、地域の自然環境(地理、生物、気候等)と個人の暮らしとの間をつなげる、まちの風景、景観、まちなみ、文化をつかさどる職能を持つ人だ。そして、現在の地域の自然やコミュニティに関わることで、代々受け継がれた土地に宿る先祖の思いや過去の自然環境、暮らしと、子どもや孫世代、すなわち将来の世代による未来の暮らし、未来の生き物の環境の橋渡しをする役割も担う人でもある。

そんな自覚の下、石井さんは、100年先にこんな風景が広がってほしいという、辻堂の暮らしをイメージした未来予想図「ちっちゃい辻堂の未来ガイドマップ」をつくった。それは、大きな企業や自治体が描く「まちづくり」とはずいぶん異なっている。石井さんが描く未来の辻堂は、多くの緑の中で人がほかの生き物を含めた小さな循環を形作り、持てるものを持ち寄って共に暮らす未来だ。こうした未来の辻堂の「最小単位」として「ちっちゃい辻堂」プロジェクトは2016年にスタートした。



左：石井さん家族。中：100年後を想定した「ちっちゃい辻堂の未来ガイドマップ」。カラベハリエという手法を用い、ワークショップ形式で作成。右：「ちっちゃい辻堂 地域連関MAP」。イラスト：北原千絵



自分のプロジェクトから コミュニティのプロジェクトへ

#03

プロジェクト休止から得た 地元コミュニティとの関わり

2016年に「ちっちゃい辻堂」プロジェクトをスタートさせた石井さんだが、そこからプロジェクトがとんとん拍子に進んだわけではない。当初は「ちっちゃい辻堂 出口」の長屋を含む約800坪の敷地全体を整備するつもりで、パーマカルチャーの講師でもあった山田さんに設計をお願いすることにした。ところが、基本設計を行った段階で土地所有者である祖父に事業の提案をしようとしていたところ、ほかの敷地での小規模多機能型居宅介護施設建設をめぐる、借入への拒否感が強かった祖父が猛反対。介護施設はなんとか建ったが、「ちっちゃい辻堂」プロジェクトはいったんストップしてしまった。

ただ、この間にも石井さんは少しずつ動いていた。2019年には現在の「ちっちゃい辻堂 久根下」の敷地内にあった築57年の木造の平屋住宅をDIYリノベーションし、コモンスペース「shareliving

緑と緑」としてオープンした。また、茅ヶ崎のコワーキングスペース「チガラボ」を拠点に人の輪を広げた。最初は一参加者として関わったコミュニティ農園では代表を務めることになった。「緑と緑」では、湘南をもっとサステナブルなまちにしていこうという人たちの「循環コミュニティ」である「サス研(サステナブルライフ研究会@湘南)」とのつながりができた。子どもたちにお囃子を教える等、地域の祭りに積極的に参加し、祖父の代からの地元の知り合いとも関係を深めた。

森の中の「大きな木」で やりたい

2021年に、ようやく祖父が遺言・家族信託の利用に同意(祖父は2022年に他界)。石井さんは土地を自分で管理し、資金の借入もできるようになった。そして、まず、自宅横の「久根下」の敷地から「ちっちゃい辻堂」プロジェクトが再スタートした。

2016年当時は山田さんをはじめ、主

に地域外の専門家を頼って始めたプロジェクトだったが、休止の間に地元のデザイナーや不動産業、農業、造園等、さまざまなスキルを持った人たちとの付き合いが広がっていた。そして、再スタート時には、地元湘南の人々のコミュニティが中心になってプロジェクトが進むようになったそうだ。石井さんはプロジェクト休止期間があったからこそ、地域の人たちがいろいろなスキルを持ち寄ってプロジェクトを進める段階へ、ステップアップができたと考えている。

この間に、石井さんのコミュニティに対する考え方も進化した。それは、自然環境だけでなく、人のコミュニティもまた、多様性や循環があったほうがよい、ということだ。石井さんはさまざまなコミュニティに関わる中で、どんなコミュニティであっても、いろいろな価値観を持つ人がいて、自分と意見の合う人ばかりではないということを知ったという。そして、その時好きな人とだけつながるのではなく、多様な人と面倒でも時間を積み重ねていくことで、時間と空間を無理なくゆるやかに共有できたらよいと考えている。

石井さんは、「ちっちゃい辻堂」の大家としての自分は、森の中の「大きな木」(マザーツリー)のような存在でありたいという。それは、森の中で木々のハブとなり次世代を育む長老の木のこと。自然と共に小さな循環の中で生きるという暮らし方を目指し、大家としての思いや大切にしていることはありつつも、そこに向けて「ちっちゃい辻堂」の住人や関わる人のコミュニティを「コントロール」するのではない。時間と空間を共有する中で、未来に向けて自然と誰かの居場所ができ、自分が蓄えた栄養が次の世代に循環していくことができたらと願っている。



左：コミュニティ農園を共有する人々と。右：地域の祭りに参加することで、古くからの住人にも知己が増えた